【主題】国境を越えて共に創る学び

【副題】日本・インドネシアの高校生による絵本共同制作とカオハガン島への展開

【学校・団体名】　宮城県宮城野高等学校
【役職名・氏名】　非常勤講師・鈴木幸恵　教諭・渡邊綾子

1．はじめに

英語科の鈴木は、国際教育に長く携わる中で以下の三つを念頭に置き、実践を重ねてきた。

Ⅰ：異なる背景の相手とやり取りする過程は生徒のみならず、教員の視野も広げることから、特定の教科に閉じない国際教育を目指す。

Ⅱ：担当する生徒の特性を活かす。数年に渡り担当している美術科の生徒は想像力、表現力が非常に長けている。この特性を英語での国際的な対話に活かす。

Ⅲ:近年推奨されている領域横断的授業の目的、展開、成果などの骨格を視覚化し、その意義を明確にする。

この論文では、2025年に実施した本校美術科生徒とインドネシアの高校生間の英語絵本を媒体とした領域横断授業実践（英語科と家庭科）について述べ、上記の三つの点の可能性を明確にしていく。加えて、絵本をフィリピン・カオハガン島の教育に活かすことから、教室の学びを社会へ開く意義についても探求していく。

2．背景

（1）アートマイル国際協働学習から得た視点

鈴木は2022年度より数年間、総合的な学習の時間で本校の「国際・語学ゼミナール」を担当した。その中でゼミの生徒と海外の高校生がSDGsについて議論を深め、その学びをもとに1.5 m×3.6 mサイズの壁画を協働作成するアートマイル国際協働学習プロジェクトに携わってきた。この活動において、海外の高校生の視点を通すことで双方のテーマ学習が深まり、生徒が相手への理解のみならず、自己理解、自己変容に発展する場面を多く目にし、一般教科のテーマを国際協働学習に統合させる可能性を感じていた。

（2）国語の視点を国際教育へ

2024年度、国語科の同僚と協働、実施した領域横断授業（国語と英語）では『平家物語』を題材とし、本校美術科一年生・インドネシアの高校生間の英雄比較を行った。海外の高校生と自分達の英雄を英語で発表しあう活動を通して、現代の生活と接点を感じにくかった古典が、日本人という自分達のアイデンティティを表すリソースとなり、英語が相手と繋がるためのツールとして捉えられた。また、日本側が男性のみを英雄として上げたことに対し、インドネシア側が上げた英雄の半数は女性であった。このことから、ジェンダーへの視点の違い、それに基づく歴史、倫理観など多分野への視点が広がった。さらに、相手が発表に使用したスライドに高い関心を示し、「次回は専門であるアートで繋がりたい」「アートについて対話したい」と美術科ならでは要望の声が挙がった。

（3）フィリピン・カオハガン島との出会い

前年度の様子と生徒からの声をもとに、次にどんな活動が展開出来るかを模索していた頃、20年ほど前に発刊されたある雑誌を手に取った。その中の、日本人の作家でフィリピン・カオハガン島のオーナーである崎山克彦氏の記事が目に入った。51歳でアメリカの出版社を退職し、退職金で上記の島を購入し、その島のインフラ、教育等の構築に尽力する崎山氏の生き方に惹かれ、夢中で読み進めた先に、「島の図書館への英語絵本寄贈募集」との案内を目にした。当時、島の教育は小学2年生までで、人々は現地語のアバヤ語を話す。現地の子供達の教育のため、英語絵本を求めているとの内容であった。この瞬間、鈴木の頭に、美術科生徒のアートと想像力、インドネシアの若者が持つ日本のアートへの憧れ、島の子供達の教育が一気に繋がり、日本とインドネシアの高校生がCanvaを用いて協働で英語絵本を作成し、島の教育に生かすことが出来たら、日本・インドネシア・カオハガン島の三カ所の共同的な学びの循環を生めるのではないかという考えが浮かんだ。早速、現在の島の担当者に連絡を取り、日本とインドネシアの協働英語絵本を島の図書館へ寄贈する手筈が整った。カオハガン島は崎山氏の著書より、「何もなくて豊かな島」として知られ、well-beingの分野で注目されている。ジェンダー、生き方に加え、「幸せ」の視点も加え、前年度、双方の生徒が英雄として発表した、日本の木曽義仲とインドネシアの女性自由解放家であるラデン・アジェン・カルティニが、島で互いの生き方を振り返り、現代の子供達への思いを込めた対話を絵本の中で展開することを企画案にまとめた。

（4）絵本が繋ぐ家庭科・英語の可能性

鈴木は、家庭科の保育の分野で絵本作成を扱う事を耳にしていたことから、同僚の家庭科教諭、渡邊に上記の案を提案した。渡邊は崎山氏の生き方、専門の保育の視点から国際教育に貢献できることに意義を感じ、管理職への相談を経て、実現に至った。保育の視点を取り入れるとともに、生徒一人ひとりの英語でのコミュニケーションのしやすさ、紙媒体・デジタル媒体における表現の適性、個性を考慮し、日本とインドネシアの英雄対話絵本に加え、手作りならではの温かみを生かした紙媒体の絵本制作も取り入れた。

3．家庭科・英語科領域横断授業

2025 年 11 月後半より、家庭科および英語の授業を連携させ、美術科 2 年生約 40 名とインドネシアの高校生約 20 名による領域横断型英語絵本プロジェクトを実施した。日本側の生徒は、クラスメイトと幼児向け絵本を制作する班と、インドネシアの高校生と協働し、英雄同士の対話を題材とした小学生向け英語絵本を制作する班に分かれ、それぞれの活動に必要な学習を両教科で計画的に実施した。

（1）家庭科の授業

始めに渡邊は、英語と日本語の絵本をもとに、言語を問わず保育の視点で共通する絵本の特徴について生徒と共有した。具体的には、子供の発達段階や興味・関心を踏まえながら、子供たちが視覚・聴覚・触覚を通して何を感じるのか、実際に声に出して読んだりページをめくったりする場面を想像させ、子供たちが「楽しい」と感じる絵本や、親子の読み聞かせに適した内容について考えさせた（図 1）。その後、生徒たちは班ごとに対象年齢や内容、子供の興味を引く表現方法について議論した。その結果、「ページをめくりながら英語で数を数える絵本」「日本の子供がインドネシアの子供に日本の伝統的なおもちゃを紹介する絵本」「カオハガン島へ引っ越した日本人の主人公が “Arigatou” という言葉を伝え、それが島に根付いていく物語」など、豊かで創造的な発想が生まれた。

図 1　家庭科の授業で使用したスライド

また、島では共同育児が行われている点から、日本の「孤立育児」との対比をし、「幸せ」の概念について考察する機会を設けた。これは当時の家庭科の教頭より、自身の育児、女性の社会進出、地域での育児サポート体制の経験談を聞いていたことがヒントになった。

（2）英語科の授業

導入として崎山氏の生き方への興味を引くため、同氏が島を購入するに至った経緯を、理解しやすい英語とスライドで説明した。その後、以下の図 2 のスライドをもとに、鈴木が「(訳) あなたが崎山さんなら、島を買うか、否か。その理由は？」と問い、生徒はペアで仮定法を使って自身の意見を言う活動を行った。“I would buy it, because it has lots of dream.”、“I wouldn't buy it, because it is too expensive!” など仮定法を活用し、「夢がある」、「家族と住む」、「高い」など自分事として表現する声が飛び交った。最後に購入するかを挙手で確認したところ、半々の回答であった。

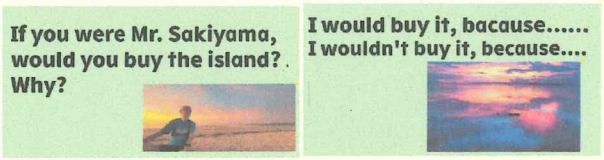


図 2　英語科の授業で使用した仮定法のスライド

その後、インドネシアおよびカオハガン島の社会的背景を共有した。特に崎山氏、妻の順子氏の生き方、順子氏が現地の女性に教え始めたキルトが後に「カオハガンキルト」として発展した経緯、さらに視覚的に現地の様子が理解しやすいよう現地担当者の Instagram の動画を活用し、現地の人の声、流れる時間を伝えた。

作業には双方からいつでも作業が出来るよう Canva を使用した。精霊となった木曽義仲とカルティニが島の朝から夕方までの時間と、森やビーチなど島の様々な場所で、其々の生き方を振り返り、現代の子供達をイメージし、対話を重ねる内容を 5 つの班が担当した。生徒は過去の二人の英雄たちがどのような内容を話すのか想像し、二人の特徴を掴んだ対話とそれに合う絵を作成した。生徒達が班毎に絵本の方向性等について議論する様子を見学した教頭らはその熱気ある空気感に驚き、生徒達の可能性を感じ取っていた。インドネシアの高校生は華僑の子孫で、春節と重なり時間が取りにくかったようだが、年度を越え完成に尽力した。

（3）オンライン交流

2 月上旬、日本とインドネシアの高校生による約 40 分間のオンライン交流を実施した。幼児向け・小学生

向けの班を統合し、日本側は「幼児向け絵本制作班」と「インドネシアとの協働作業班」からなる約10名、インドネシア側は3〜4名の生徒で構成された混合グループを編成し、5つの教室に分かれて英語で対話を行った。交流では、鈴木が紹介したインドネシア式じゃんけんで話す順番を決めた後、完成した絵本を互いに見せ合い、工夫した点や苦労した点を共有し、それぞれの作品に対する感想や質問を英語で伝え合った。

著者達に加え、英語科教諭等も巡回し技術面、英語面のサポートをした。インドネシア式と思われていたジャンケンの方式が現地では知られておらず、むしろ日本式（グー・チョキ・パーまたはRock, Scissors, Papers）が主流で、その確認、勝敗で時間がかかったり、相手が始めからアニメの話を持ち出したため軌道修正したりと流れに乗せるのに手間取った班もあったが、絵本を見せながら事前に用意した感想を述べた後には、その時に作成していた彫刻や絵画の作品を見せて説明したり、AIで互いの言語を試したり、一人が作成した部分を見せるのに身を乗り出して絵本を提示し、一人が感想を話し、一人が相手の英語を聞き取ろうと耳を傾けてチームワークで伝えようとしている班もあった（図3）。

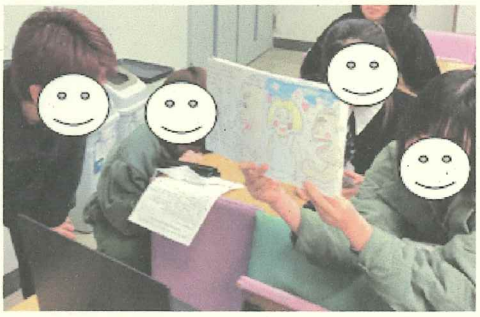


図3　オンライン交流でチームで伝え合う様子

英語のリズムやイントネーションの点から伝わりにくい場面もあったが、事前の協働作成の経験と、自分達のアートを伝えたいという気持ちが前面に出て、非常に熱気溢れる時間であった。相手が日本のアートに憧れを抱いている事実も、生徒の積極的な姿勢を後押しした。また、普段の英語の授業ではあまり主体的ではない生徒が、自身の将来の夢を相手に語る場面が見られ、著者始め多くの教諭がその様子に驚いた。

参観した教諭からは「楽しそうに全部自分達で進めていましたよ。助けを求められたのは、最後のZoomの切り方だけでした。」、「コミュニケーション力がとても高いですよね。」との報告を受けた。インドネシアの高校生は班毎のオンライン交流に緊張していたが、日本の生徒の作品を見たり、アニメの話をしたりするうちに和やかな雰囲気になり、中には画面越しにダンスを始める生徒もいた。オンライン交流後、相手側の教諭より楽しかった余韻の残るメッセージ、写真と動画が送られてきた（図4）。

図4　オンライン交流後のインドネシア高校生

（4）成果物としての絵本

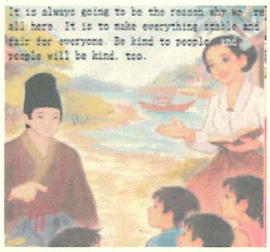
幼児向け絵本においては、音読時のリズム設計や“Arigato”のような文化的要素の保持、仕掛け絵本としての工夫など、言語・音声・視覚表現を統合した多様な創意工夫が見られた。“Japanese toys”と題した絵本では、日本の伝統的なおもちゃに対し“What's this?”と問いかけ、一枚紙を上にめくるとその説明が出て来る仕掛けがあった。図5では凧を差し、これは何かと問いかけ、凧の絵を上にめくりあげると、“This is 'Tako.' It floats in the wind. Float... Float...”と日本とインドネシアの子供達が凧を空に飛ばす場面をFloatという単語の繰り返しのリズムと温かみのある絵で包んでいる。

図5　仕掛け絵本の例（凧について）

また、インドネシアとの協働制作絵本では、木曽義仲は平和、カルティニはジェンダーに依らず平等な社会への想いが対話の中で表現された（図6）。木曽義仲のセリフでは「（訳）現代では学校で外国語を勉強しているようじゃ。」という、互いの言語を学びあうことで平和を願う態度が表現されていた。一方、カルティニのセリフで、当時の女子の12歳以降の教育制限、結婚前後に外出が許されない“tradisi pingitan”（ピンギタンの伝統。日本語では「婚前閉居の伝統」。）について触れられ、教室全体で当時の女性と現代の自分達の生

き方について考えるきっかけになった。

（概要）*島の夕日のビーチで、精霊となった二人が再会し、現代の教育、情報社会などに目を向ける。最後に現代の子供達に希望を述べる。*



（セリフ）*義仲「不運な事があっても未来に向かって欲しい。」カルティニ「ジェンダー、民族、国籍、信念を問わず平等で尊重し合える世界であって欲しい。」*

図６　一つの班の絵本概要と絵の一部

また、島の様々な時間軸と場所で英雄同士が対話を展開したが、各絵本の表紙には図書館、ビーチ、キルト小屋といった島の主要な場所がカオハガンキルトをイメージしたモチーフで配置された。キルトの一枚一枚の模様の中に日本、インドネシアを表すものも含まれており、英雄の対話の内容に加えて、日本とインドネシアの要素をカオハガンキルトで包括する、秀逸なデザイン展開が見られた。図７の手前に並ぶ５冊の絵本は、日本とインドネシアの高校生が国境を越えて共同制作した成果であり、それぞれ異なる物語や表現をもちながら、一つの展示として並ぶことで、本プロジェクト全体の広がりを象徴している。

４．生徒の変容

この授業の前後に行った日本とインドネシアの高校生へのアンケートによると、英語への不安に関する変化は少なかったものの、この活動に対し尽力した実感、相手への興味、自分の強みを出せたという点で大きく向上していた事から、アートを通した協働作業が功を奏したと考えられる。さらに日本側では英語がうまく伝わらない悔しさを訴える生徒がいる反面、「アートは言語を越える」と言語に寄らず協働作業による一体感を得ている生徒もいた。

「幸せ」に関しては、双方とも授業前は生活の安定、自分の時間といった一般的な回答が多かったが、授業後は、「幸せの在り方は人や環境による」、「経済的豊かさでは計れない」といった相手と自分の状況を比較して得られる視点が多かった。さらに日本側では、SNSに縛られがちな自身の環境を述べたり、「日本では島のような幸せが薄れているのではないか。」と感じたりする生徒がいた。アートに関しては、「色使いなどに違いがあり、これは地理風土による影響もあるのかなと思った。」といったように美術の専門性からの視点も多く、著者達は生徒達の洞察力に鞠ならされた。

５．まとめ

この授業を実践したときの生徒は三年生になり、現在は後輩にあたる現二年生が、授業で先輩たちの作品を読み、島の子供たちが興味を持ちやすいように英語でレビューを書いたり、手紙を書いたりして発送の準備を進めている。また、学校の図書館には、手に取ってみたくなるような標示、一冊ごとに日本語のレビューをつけ、先輩たちが作成した絵本を展示した（図７）。現二年生が先輩たちの作品にレビューを添えて展示したことで、国際協働の成果が学校内で継承され、次年度の学びへとつながる循環も生まれつつある。

現二年生が書いたレビューに、「身を削って歴史を作り上げた人たちのお陰で自分達の今の生活がある。」という記述があった。鈴木が相手側の教諭に What's up でこの事を伝えると、「同僚の歴史教諭はいつも、『国民的英雄の犠牲の元、現在の私達の生活が成り立っている』と生徒達に伝えている。」とすぐに返信をくれた。一年前まで互いを知らなかった日本とインドネシアの高校生が、平和や歴史、人権に思いを馳せ、絵本を共に完成させた。その絵本は今、カオハガン島の子どもたちへ届けられようとしている。離れた場所で異なる文化や価値観をもつ人々が、一つのものを創り上げ、それがまた次の子どもたちの学びへとつながっていく。教室から始まった小さな協働は、国や世代を越えて学びを循環させる可能性を秘めている。著者らは今後も、生徒一人ひとりの得意や専門性を活かし、教科や国境を越えた新たな学びの場を探究していきたい。

図７　図書館に展示された絵本

【参考文献】

Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence.* Multilingual Matters.

崎山克彦（2003）『何もなくて豊かな島』新潮社